

東京女子高等師範學校内会園幼稚園協会

育教の兒幼

主橋惣幹 三

號月一十

育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長

東京女子高師範學校校長 茗木清次郎

主幹

東京女子高師範學校教授 倉橋惣三

贊助員

(五十音順)

帝國教育博物館長 東洋大學教授

棚橋源太郎 田子一民

東京女子高師教授 東京帝大醫科講師

東京女子高師範學校校長 東京女子高師職托

高島平三郎 龍山義

東京高師教授 東京高師講師

帝國教育會理事 東京帝大醫科講師

棚橋源太郎 田子一民

慶應大學教授

帝國教育會理事

棚橋源太郎 田子一民

東洋幼稚園長

京都帝大教授 東京女子高師教授

棚橋源太郎 田子一民

早稲田幼稚園長

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

帝國教育會會長

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

東京市學務課長

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

東京高師附屬小學校主任

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

東京女子高師教授

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

東京女子高師教授

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

東京市觀學長

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

東京女子高師講師

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

大阪市教育部長

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

文博 文博

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

文博 文博

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

文博 文博

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

藤井利五

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

藤井士川

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

藤井末之助

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

文博 文博

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

文博 文博

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

文博 文博

文博 文博

棚橋源太郎 田子一民

幼児の教育 第七號 卷四十二第

次 目

行啓を迎へまつりて	倉橋惣三
幼稚園編目	馬場定一
保育日記	
砂場自由遊	オ、ツカ、齋
ある一日	吉川コハル
断片	河野ソノ
第四回全國幼稚園關係者大會	西
泰西名家幼稚園觀	記
第四回全國幼稚園關係者大會狀況の御報告	市川みち
夢の國旅行	「十六天」 よしを

東京女子高等師範学校内会
幼稚園協会本日

幼兒の教育

主 倉 橋 物 級 三



行啓を迎へまつりて

倉 橋 惣 三

皇后陛下には、十月二十七日、東京女子高等師範學校へ行啓あらせられ、附屬幼稚園も亦、御巡覽の光榮に浴した。バラツク平家建の校舎は廊下が長い、それを幼稚園まで、玉歩のお運びを願つたゞけでも、此上なく畏れ多い。

第一の室で、幼兒達は、まゝごとと床上積木をして居た。陛下には、畏れ多いほど、幼兒達の傍に近くお進み過ぎされ、ボール紙の人形のお家や家具をつくつて居る、女の子供達の小さい指さきにほゝ笑ませられた。そして校長の命によつて、御説明のためお側近く進んだ私を顧みさせられて、子ども達は皆丈夫ですかといふ意味のお言葉を賜はつた。そのお心の籠つた、第一のお言葉の有り難さが、今も尚ほ耳に残る。積木では軍艦が出来て居た。男の子達は其のマストを飾る滿艦飾の旗を塗つて居た。昔の積木は小さいもの許りで御座いましたが、今日では斯うした大きい積木を用ゐますと申上げると、子ども達に取扱ひいゝでせうねといふ意味に仰せられた。陛下が御幼時、此の幼稚園にあらせられた頃の、小さい積木の遊びをお偲びになつたこと、拜察申し上げた。第二室の作業室では、粘土製作の最中であつた。或る子どもは林檎やバナヽを作つて居た。或る子どもは人形をつくつて居た。或る子どもは美事な象をつくつて居た。陛下はそれ等の原始藝術的おもしろさに、一つゝほゝ笑ませられて、一人々々之れは何ですかとお尋ねになつたり、子どもの頭を、お撫で下さつたりした。有り難さとうれしさと、可愛らしさに溶けあつた、やわらかい笑聲が、室内にこぼれる。

第三の室は自由畫と塗り繪であつた。小さい畫家達は、椅子をづらす様にして、机に腕をつけてクレイオンを動かして居た。陛下は、畏れ多くも、その後ろから、そつと其の小さい椅子をお押し下さつた。一人の子は、静に身を浮かせて、机に近く押して下さつた椅子に、再び静に腰をおろした。そして、また一心に描き出した。陛下には、その繪を御覽になつて、よく描けますねと仰せ下さつた。もう一人の子どもは、陛下がそつと椅子をお押し下さるのも心づかぬらしく、たゞ一心に塗り畫を塗りつけた。陛下は御手を其の椅子からおはなしになつて、一生懸命ですねと仰せながら、一段と晴やかにほゝ笑ませられた。私は眼の底が熱くなるを覚えた。やわらかい嚴そかさ、嚴かなやわらかさが全身に漲るを覚えた。國母陛下に椅子を押して頂きながら、それにも氣づかずに、一生懸命に畫をかいて居る子どもの姿。それは牡丹色の洋服を着た、小柄に肥えた、まる／＼と頬の紅い子であつた。

第四室の一方の机では、器用に手を動して鉛をつかつて居た。いろ／＼の色の紙が、いろ／＼の形に切られる。一人の子どもが、面白い形のものを切つた。大森太夫が、之れは何だねと尋ねられたら、もぐらと答へた。それが、人々には、まぐろと聞えた。地の底のもぐらと、水の底のまぐると、大變な違ひだが、實は、どちらとも思へないことはない形であった。お側の人々が、ほゝと笑つた。聲を立てゝ笑つた。それ程、實にそれ程、全體の空氣が、やわらかに溶けて居た。子どもの世界に打ちくつろがせ給ふた陛下の御態度や、御言葉を中心として、全國の空氣が、ゆつたりと、やわらげられて居たのである。もう一つの机では、小さい赤い紙を糸に通してつないで居た。その薄桃色の紙片の色と、糸に通して麥わらの黄な色と、やわらかい線とが、此の室にふさわしく机の上に散らばつて居る。

さつきから、ピヤノの音が聞えて居る。子どもの軽い聲も聞えて居た。それは遊戯室の方からだ。

陛下が、遊戯室にお入りになると、子ども達は直ぐ輪になつた。そして、ピヤノに合はせて遊戯をつづけた。「お口さま」「月の鬼」「水兵」陛下には、ずっと前へお進みになつて、お眼鏡をお目にあてられながら、御熱心に御覧になる。無邪氣

な手振り、足とりに、ほゝ笑ませられて、いつ迄も御覽になる。「雀の學校」小さい顔と顔と向ひあはせて、チツパツバ／＼といふのが、ほんとうに雀の子の様に可愛／＼。

最後に、幼兒製作品陳列室へ御入りになつた。そこは窓をあけ放つである。窓の外には秋晴の日光が庭一ぱいにあたつて居る。窓のすぐ向ふが砂場にある。そこでは多せいの子どもが、わき用もふらないで山をつくつて居る。以前の建物の位置とは少し傍へよりまして、庭もせまくなりましたと申し上げると、そうですね、藤棚もなくなりましたねと仰せある。惜しいことをしましたね。あの下で遊んだものだと仰せある。陛下の御幼時の御記憶が、あり／＼とそこにお見え遊ばすのであらう。私達の使ひなれた言葉でいへば、いろいろ／＼おなつかしく思召すのであるう。と私は思つた。砂場の遊びは又一としきり盛になつた。無心な子ども達は、手も休めずに砂を掬つて居る。

陛下が幼稚園で第一に御下問になつたことは、前に書いた様に子ども達の健康であつた。お歸りがけには、また私を頼みさせて、さつでも子どもは可愛／＼らしいものですね。と仰せられた。此のお言葉は、たゞに此の幼稚園へでなく、幼稚園といふものへ賜はつたお言葉として拜してよからう。單に幼稚園と限らず、我國のすべての幼兒へのお言葉として拜してもよからう。

私達は、それから講堂の方へお伴申上げて行つたが、あとで、幼稚園の保婦諸君は、こみ上げて来る涙とゞめあえず、集つて泣いたといふ。おごそかにのみ恐畏し奉つて居た國母陛下の、子どもへの、あの、おやさしみ、あのおしたしみ。お待ちうけ申し上げて居た間の、おじそかな心持も忘れて仕舞ふ様に、全國、たゞ香ぐわしい和氣の裡に溶けた有り難さが、またしても涙にこみ上げて来て、なんにも言へずに、たゞ泣いたといふ。

幼稚園細目(續)

馬場一定一

第六恩物——

- 1 實驗
- 2 形態と性質とに就いて第五及第六恩物の對照
- 3 新しく提示した積木の名稱
- 4 材料を組立に使用する途を暗示する様な設定遊
- 5 考の設定せられたる自由遊
- 6 絶對自由遊
- 7 團體遊

第五恩物の性質は隨分澤山にあり、且つ興味も多いものであるから、實際いつまで持つて居ても倦きる事はあるまいと思ふ。だから一年中を通じて、吾々の教育的取扱の中でも最も有利なものゝ一となつて居る。併しこれは構成的仕事としても、その美的方面よりも寧ろ構成的方面に傾いて居るのである。

居るものである。之に反して第六恩物は直接子供の美に對する好愛に屬したものであつて、「柱」を提示する事は子供を仕事の美術的方面に醒めしめて、形態の世界にだんくとり込ませ、其經驗を増すと同時に、美術的にして美しいものに對する感じと愛とを涵養して行くものである。故に、子供等に第五恩物が自由に使へる様になり、自分自身で思ふ様に且つ満足に自己を現はす事が出来る様になれば第六恩物を提示すべきである。子供等は既に第五恩物に於て可成多量の材料を使ふ事には慣れて來て居るのであるから、單に材料の操作といふ點に就いては充分準備が出來て居る筈である。所がこの材料は建築的形式に於て發達して居るのであつて、子供等は從來からいふ方面にはあまり親しんで居ない爲に、第五恩物の様に獨で暗示を受ける事が

出来る様なものは無い。以上の様な理由がある上に、子供等も今は既に大きくなつて相等に経験を積んで居るわけであるから、第五恩物に對するよりも、設定的遊びを一層多く與へる事が出来る。併し乍ら、其の遊びに於ては、この恩物の性質に就いての暗示を與へるといふ考に止めておかなければならぬ。この恩物は概ね第二學期の始めまでは提示されない。勿論提示の時期に就て厳格な規定がある譯では無いけれども、子供の要求する事に由つて其必要の時期がわかるのである。この木片を使って色々と子供等が實験した後には、子供等に第五第六兩者の似て居る所や異つて居る點を發見させる爲に兩方の恩物を比較對照させる。そして新しい木片の術語を教へ、そして柱體は恩物の中の特殊の特色として顯はれて來るのである。それからこの新特色の使ひ途を暗示する爲に設定遊びを課し、この様にして與へられた考を適用させるべき澤山の機會を自由遊びの中に與へる様にする。かくして其の使ひ途を充分に諒解し且つ熟練の度が進んで來れば、この恩物を以ては團體で遊ぶ事が著しい特色となつて來るのである。

第七 恩物

總て積木を使用する場合には、其積木を箱から出すのに順序よく取り出し、其からすんだ時にそれを元の通りに組み立てゝ箱に納め、元の棚に返す様に教へなければならぬ。道具を使ふのに順序よくしたり、丁寧に取扱つたりする事は小さい課業ではあるけれども、米國の家庭では子供等にこんな事を餘り嚴重に躊躇して居ないから、保姆は是を根本的に事柄と信じて居るのである。けれどもこれを授ける場合に其動作を全體の子供に一致させる様に強ひる事はよくない事であつて、各個人的に出来るだけ早く、且つ出来るだけ上手にさせる様にする事が必要である。總て恩物の提示に關しては豫め定められる可き時があるので、保姆が觀察をして居て其の時機を見計らつて、丁度好いと認められる時に提示したら好いのである。此の場合一人や二人の遅れた子供があつても、其れにはかまはないで進行していくつて、遅れた者に對しては其々各個人に適した材料を提供すると言ふ事を注意しなければならぬ。

圓、四角及び三角の板の擴大せられたる材料を使用す。

1 限られたる材料を以つての實驗的遊び。

2 此の恩物を以てする仕事が進むに連れて、材料の使

用法、殊に先づ相稱的排列を暗示すべき設定遊び。

3 總ての三角形に與へらる可き三角板といふ各稱。

4 時々團體遊び。

此の板並べば先きに與へた恩物の補足として、年の初めから使用せられるものであつて、他の材料を使用して既によく知つて居る初步の形態に關するものを除いては、平面の分解、角の展開等の數學的方面の取扱に力を入れてはいけない。小さい子供には先づ最初に圓板を與へて、次に四角及び二等邊三角の順序に與へられるのであつて、初めには材料を限つて渡し、是れを使ふ事が進むに従つて其の量を増していく。此の恩物は小さい子供には大きい子供程、度度は使用させない。大きい子供には三角板を使はせる仕事に力を入れて、初めに二等邊三角板を與へて是等の組み合せを會得してから、ほかのを與へるのである。其から相稱形又は他の言葉で言へば自然的に子供が導かれる所の圖案の

仕事に力を入れる。子供等に與へる材料の量は初めには限つて置くが、好い子供等の能力が進んで排列が發達して来て、中には他の子供よりも澤山の數を組み合せる事が出來る様な子供がある様になれば、其數を増して行く。初めにはどんな組み合せにも一種類の板を使はせ、後になつて保姆の考へに依つたり、子供の選擇に由つて色々な板が組み合はされるのである。子供を自由な仕事にうまく導くのに最も有効と認められる方法は次の通りである。先づ保姆は摸倣に由つて子供等に一つの中心(或は基礎とも言ふ)を作らせる。其れから其の中心のまわりに四枚、八枚乃至其れ以上の板を子供等の申出に由つて、子供等が適當だと認める如くに並べるのである。此所で注意しなければならぬ唯一の仕事は、正しい平衡を保つ事である。此の仕事をする時に子供等は部分の正しき平衡を確める爲には、向ひ合せになつて仕事をすることが、便利であるといふ事を知つて来る。そうして時が來れば全く自由に遊ぶ事が出来る様に進歩して來るものである。経験に由ると子供は大人のもろみを描く様に材料をたやすく適用しないものである。故に

保母は設定遊びの手段に由つて漸次摸倣を以つて是等の形の幾らかを授け、斯くして一層進んだ使ひ方を子供に暗示するのである。板並べは一年中を通じて可成使用せられるけれども、積木の様に始終では無い。

第八 恩物

一時から十時までの箸を使用する。

- 1 材料の量を限つて中位の長さのもので皆同じ長さのものを初めに使つて實驗。

- 2 一二三の設定遊び。重に子供等の毎日の経験の内で、

興味あるものゝ説明に用ひる。

- 3 偶發的に數、例へば數へる遊びの如き。

幼兒は特に線畫に興味をもつて居るから、小さい方の小

供には箸は重に線畫の遊びに用ひられ、そして又板と組み合せて物の説明に使はれるが、一般にそう早くからは使はせない。

大きな方の子供には是は特に説明の手段として一年中を通じて時々使用させる。例へば、子供の一團が農園を見に

行つた後で、見て來た全體のお話を各子供が定つた受持つて建物や、畑や、そんなものを描き出すが如きものである。此の遊びは長い箸を使用する爲めに床の上でさせるのである。又或る場合には、或る目的物を現はすにも使用せられる。

第九 恩物

自由遊び及び設定遊びの兩方法に由つて、

- 1 實驗。
2 相稱的排列。

小さい方の子供には全環のみを與へるのであつて、初めには一番大きい環から與へて其數は限る方が好い。此の恩物は時々使用せられる。

大きい方の子供には、一番小さい四分の一環を除いては一年中を通じて適宜にどの形をも用ゐる事が出來、進んで來れば利用する事が出来る丈け、たくさんの材を使ふ事を許してよろしい。其の遊び方は概ね自由であつて、材料をもつと廣く使はせる爲に、子供の注意を轉換させる必要が

起つて来る時、設定遊びを課するのである。

第十 恩物

扁豆の代りに空豆、中位の大きさの小石、柄の實等が使はれる。仕事は大部分は自由であつて稀にしか使はれない。實驗的遊びの後で、次の様な方法で或る設定遊びを課するのである。先づ動物や異物等の様な物の形をはつきりと線書した厚い紙を子供等に與へてやつて、子供等は其の臨畫を此の材料で辿つて行くのである。柄の實の様な大きい材料が得られる地方では、非常に勝れた結果を得る事が出来、子供等は幼稚園の床の上に大胆に自分等の考を書き出し、是れに由つて非常に喜ばされるのである。

恩物の使用に於て、前に述べた様な方法に由つて得られる所の總ての利益、例へば、隨時に得た所の色々な知識、新らしい努力を起すに至る所の總ての刺戟、障害に打ち勝つ事に依つて得られたる、總ての誘因等を表示する事は不可能である。併し乍ら経験の示す所に従へば、斯くの如くにして行つた恩物の仕事が、子供に自發、自信、自制、材料を支配する力、材料を手段に用ひて自己を發表する能力等の發達が、從前の方法に依りて發達するよりも遙かに勝つて居るといふ事を指導する事が出来る。保母は斯くの如くにして自己を發表する充分な機會が與へらるゝ時には、小さい子供の創造的能力の如何に偉大であるかに度々驚かされて來た事である。多くの場合特に第五恩物の積木及び第七恩物の板を使ふ場合に、其材料を創意的使用法に於て子供の或る者は保母自身よりも勝つて居るといふ事實を確めて來たのである。子供等が或る一つの事に成功し、更に又其より大なる成功に進んで行く、歡喜は其れ丈けで充分の價値がある。

博く経験をして來た或る保母が、以上の方法を實行して居る幼稚園を観察した事がある。特に大きい方の子供の仕事を見たいと申込んだのであるが、受持の保母は責任上、「今朝は板並べをさせる豫定になつて居りますが、御希望があれば變更しても差支へありません」と。で其の參觀者は第五恩物を使はせて見せてもらひ度い事を要求した。其

所で保姫は大きな第五恩物を子供に與へ、參觀者は自由に子供等の間を廻つて其の仕事の仕振を觀察した。暫くの間子供等は全く自分を忘れて仕舞つて働いて居たが、終に各子供の考と能力とを表はした所の！勿論、其の形は各々異つて居るが！心から樂しき十五の別々の形が出來上つた。參觀者は保姫の方を向いて「是れは不思議な事！私は全く分りませんが、何うして此處までに出來たのでせう」保姫は直ぐ答へる事が出來た。「別に何も不思議な事はありません。是れは只獨立した動作の確實なる成長の結果に過ぎないのでですから。初めに私は色々な材料を自由に

獨立して使ふ習慣を此の小さい人間に訓練したのです。今御觀になつた現状は此の方法の自然の結果であります。」

故に私は恩物を使はせる上には、此の計劃を若い保姫達に躊躇なく提供したいのである。私は此の計劃を堅く信ずる者である。私は此の方法が、フレーベル法の仕方から何れ位離れて來て居るかを能く知つては居るが、併し子供の娘の正しい方法の根本である所のフレーベルの教育説の生きた主義を最も確實に體現して居るものである事を信ずるのである。(續く)

保育日記

砂場自由遊

京都真乘院

オオツカ

大正十三年九月二十四日午前十時——十一時。

白組。希望兒(約二十名)。久しぶりの登園に、大上先生にお願して白組の砂遊を見せていただく事にした。

鐘がなつてから一度幼兒を保育室に入れ氣を落付かせてから、希望兒を砂場で遊ばしめられた。はちやま四箱を貸與ふ。

増田悦子さんと橋本依子さんとの二人はいつもグループになつて遊んでゐる。小生の目についてゐるうちではまづ一等よく相互生活が行はれてゐる組だらう。少し離れて別に構成をしてゐる時でも、折々話會ひ又は相手をちらと見たりして、どしど進んで行く所に、確に「心と心との相互作用」が行はれてゐると思はれる。

今日の砂遊びで目下解決せねばならぬ問題は一つの組と他の組との衝突であつた。増田さんの工事がどんと進んで行くので陽の方でまだ馴れぬらしく、一人で山をこしらへてゐる鹿島さんと腕が突き當るので「押しに来る」と小生に訴へる。「鹿島さんがそこでしてゐられるのだから、こつち側へいらつしやい」と、小生の側の僅かな地面を譲つた。これにて小生は殆ど立錐の餘地もなし。小生の考では此際よく出来る増田さんにも、寧ろ砂遊びにはまだ初心であるらしい鹿島さんを指導して、此遊びの興味を感じしめる

迄にさせたかつた。静かに、しかも側目もふらずに、自己の現在有する力だけで遊んでゐる彼の姿を見る時、その内の努力は増田さんに優るとも劣らぬものありと思はれる。

もう一つの衝突は、橋本さんと高田光治さんとであつた。十時半に鐘が鳴つたが續いて遊ばせてゐた時だが、橋本さんの組は山のトンネルとお稲荷さんとの工事が出来上つて平地に川の土地を築きつゝある時、一方高田さんの一組は漸次範囲の擴張につれて橋本さんの領土に侵入して来る。

平地に僅かの起伏を作つてゐる橋本さんと、この工事を懐して自己の計画通りどしど進行して來るので、橋本さんは小生に其旨を訴へる。小生は「あなたは何處まで出来ましたか」と兩方に聞いて「それでは此川と川とを繋かせたらよいでせう。……人のしたのを懷さないで、人のしたのを使つて自分も一所にこしらへて行きなさい」と云つたのを高田さんが解してであらうか「自分のトンネルと橋本さんのトンネルを通る線路を續かせて、其間を横切つてゐる川に鐵橋を架けやう」と申出でた。それには橋本さんの作つた線路へ支線を出す爲、堤防の一部を取除かねばならな

かつたが、それは自己の作品を一層優秀ならしめる爲でもあり、斯くして初めて兩方の組の「變化ある統一」「異なる個性の相助關係」即調和が行はれるのであるからして、小生は此高田さんの提言を目下の問題への喜ばしき解決の曙光と受け入れて其通りにした。

かまぼこ板で鐵橋をかける時、橋本さんもそれに加つて此處に兩軍同盟の握手を結ばせたら、一層興味多いものだつたらうが、橋本さんは此の時、他の方をせつせとやつてゐたので、それ迄には至らなかつた。

橋本さんは先程から大分遊んだので、既に興味の項ノックを越えて稍疲れ氣味に見えるのに反し、高田さんは今將に興味の増えある時と見えたので、小生は橋本さんに「もうあなたは大分に遊んだのだから、此處までこしらへたのを全部高田さんに譲つてあげなさい。彼が之をあなたの計画

通り受納するか、それとも自己の計画を加へて變更せんとするか、總てを彼に譲つてしまふ傍観者の位置に立たうじやありませんか」といふ様な意味の言葉を云つたので、橋本さんは漸て砂場を出た。

終に望んで一言して置く。小生が幼稚園に於て砂場を最も神聖な場所と云ひ、砂遊に重大なる價値を置くは、只に砂場が幼児の自發活動をなすに格好の場所であるのみならず、實に先生が子供より學ぶべき最適の絶好の場面を造る

次に今日の此保育に特に注目すべきは、上村登さんの考案であつた。彼は家から持つて來たのであらう、カルタの札の様な厚紙を四角に砂上に立て並べて家を造り、其上に更に屋根をこしらへ、且破れたはちやまの鳥居の、かけらを用ひて煙突まで立ててゐた。こんな家が二三軒並んで、又一方には此一枚の札をうまく折り曲げて船をこしらへてゐた。この考案は丁度先程竹内先生が小生に見せられた自働車の厚紙細工と同種の手工に屬するものなのですこぶる興味を感じた。この尊い表現を學んで「厚紙細工」とでも稱すべき一新保育科目を創設する事にすれば、砂遊と聯絡して保育科目相互の綜合の一端ともなり、又製作活動を幼児の生活に直接關係ならしめる様に具體化する事も出來て、今回の講習の主旨にも叶ふ様に思ふ。

からである。監督や指導の爲め先生が附いてゐるといふのは未だ初步の見に過ぎない。砂場の眞の價値は幼兒が仲善く協力して遊んでゐる時、側らより之を熟視してゐる先生もいつしか我を忘れて、其雰圍氣の中に包摶せられてしまふ時に初めて現はれやう。斯くして再び我に歸れる先生の心の中には、今迄に無かつたあるものが得られやう。これを悦樂の境と云はうか、感激、生命と云はうか、或は「教育的惜心」と云はうか、「神性」と云はうか、言葉の末では云ひ表し得ないが、兎に角保育者に永遠の生命を與

へ、其の天職を樂しましむるに充分なる體験である。小生は自分の小學時代に、土曜より日曜にかけて演邊で砂遊をした時の愉快さを思ひ起して、もう一度あの境地を味ひたひと思ふ。それをあこがれ望みつゝ機會ある度に我國の砂場に行くのだが、今日の現状ではまだ（前途遼遠の感がする。しかし決して失望しはしない。先生方の御指導と御助力とを仰ぎつゝ、理想の園に向つて歩一步と堅實な歩みを進めて行かうと思ふ。

（廿大日夜九時半）

あ る 一 日（園の音信中より）　　土浦幼稚園　吉川コハル

八時半の鐘がカン／＼／＼とひゞく、ブランコからおすべりから、シーソーから、山茶花の下から、と急いで子達は組々の列に入る。かくしてお庭の一隅に整列し、姿勢を正して東の方に向つて天皇陛下に御禮する。幼い子達にも

呼吸をして居ると、丁度此時、
　　唸りをたてゝ飛行船が雄大な姿を現して來た。

　　ワット云ふ聲、手を擧げる、萬歳を叫ぶ、保姆も子供になつて叫ぶ。飛行船は常になく低く、低く、次第に低く、する「お早う」もすんで、青い空澄み渡る空氣に一同が深うなりをたてゝ青空にと歌ひ出すもある。飛行船は低く緩

やかに園の上空を一週すると、急に高度を加へて次第に小く西に向つて消え去つた。此日は朝から飛行船のお見舞で子達は非常な元氣。

リンと笛の組は今日は先に唱歌、リンの組からいへば列の先頭から勢よくかけ足で昇降口に向ふ。

各自の組の室に入つてお仕度。……帽子をとり、お鼻を奇麗にし帶を下げる。ピアノの合図に整列する。線の列は

お上手赤は少し後の方がと注意する。一直線に氣持よい程真直ぐになる。再びピアノが響くと共に、手を下ろし足並静に圓形の定めの席につく。保姆がピアノの手を止めて振りかへつた時は、幼兒はそれ／＼沈黙靜肅の態度になつて居る。一分！三分！五分！校庭の騒ぎも廊下の足音も邪魔にはならない。

自分の事は自分です。人のいひつけは…………と静に唱へて眼を開く。

立つて發音と發聲の練習をする。ソ、セ、ス、シ、サー。お口／＼しつかりと動くやうになつた。

後はお好きな唱歌、獨唱する兒もある。先生「きれいな

ガラス」をといふ。保姆が一三度歌つて聞かせた事がある。教はないのに歌へるでせうかといへば、歌へる／＼といふ。彈き出すと意外にも上手に歌ひ終つた。奇麗な可愛い唱歌で子供は大好きなのである。春入園の頃は短い歌一つも伸々覚えなかつたのが、知らぬ間にひとりでに覚えて了つたので、子供の發達の早いのに驚く。時間が來たので一同外に出る。

お庭では先生々々とあちらからもこちらからも、毬をなげる。一人で受けてかへすのは伸々骨が折れる。でも先生の相手が子供は一等うれしいので、一生懸命高く遠へと投げる。けれど男兒の元氣のいゝのはとても叶はない。遂う／＼苦しくなつて、先生は一つ時お休みといつて腰かける。女の兒は寄つて来て手をとる。後に立つ前による。おや。あなたの耳の汚いこと、それ御覧なさい、こんなに黒く爪にかかつたでせうと取つて見せる。今夜お湯に入つた時手拭をぬらして自分でよく拭きとのですよといふと優しくうなづく。先生私の爪きれいでせうと出して見せる兒もある。あなたはといへば手を後にかくす、餘つ程汚い

のですね、と強いて引き出して見ると、長くて黒いものが一杯になつて居る。オヤ汚いといふと子供も笑ふ。

先生、榮ちゃんが〜といふので顧みると、之は亦、砂の中に轉んだのか顔も手も砂まみれ、お鼻の一本棒が泣くのにつれて大きく下つてそれが亦お砂の二本棒、可笑しくもあり、氣の毒にもあり、手のつけやうがない。お目々に砂が入つてはとソーッとつれていつて洗はせる。

遊戯の時間となつた。——溫度が急に下つて、少し寒いので行進を先にする。ピアノにつれて緩く、早く、強く、かるく、或は跳躍し、しつかりと運動する。あつくなつた

あつくなつたといふ聲が聞こへる。定めの曲を彈くと一同が圓形になる。

何をしませうか…………、鯉さん鯉さんといふ、板の間が冷いから鯉さん寒いでせう。おじぎおじぎと亦いふ、おじぎも座布團が出来てからにしませう。では今日は先生のすきなもの、いゝでせうといつて律動の水兵と飛行船を彈く。終つた時は如何にも面白かつたといふ様に、ニコ〜。後はお庭の遊びに亦は手技だと自由行動をとる。

手技室、——今日は繪と貼紙である。

備へつけの箱から自分のクレオンを取り、畫紙を取り、空席を探して腰かける。今日は飛行船が仲々多い。茂さんはあまり大きくて尾の方が紙から出て居る。いつも大膽に力強く畫く兒である。富夫さんは飛行船から四方八方に玉のやうなものが突き出して居る。先生船だつて飾るでせう。飛行船を飾つたのだといふ。子供の想像は満艦飾から飛行船の満船飾と走つたのであらう。クレオンを仕末し、繪をカバンに入れて出で行くもあり、先生これお帳面に貼つてと渡し行くもある。

貼紙は大抵自由貼方迄進んで居る。子供達は面白くてならない。「何色をあげませう?」「先生、綠」では四つあげますからそれよりお好きにお貼りなさい、後から亦あげますと次にうつる。
私は先生紫のまる。まるを六つ下さり、こゝにかう並べて貼るのと指さす。色の取り合せも仲々巧である。美代子ちゃんの前に行くと樟色の四角が變な所に貼つてある。一寸注意してなほさせたいのを我慢して見て居ると、先生樟

色を澤山といつて並べて並べて立派な形が出来た。美代ちゃんには豫定があつたのである。餘計な事して子供の獨創を破壊す所であつた。あゝよかつたと保姆は思った。

十二時近く太鼓の組のお歸り時間が來た。太鼓がなる、太鼓の組の子供は貼紙帳を片付けて出て行く、残つた子供もボツ〜お仕舞する。

一同が食前のお手洗ひをし、お辯當を喰べて後は一つ時

お庭で遊ぶ。午後の貼紙が始つて午前に入れなかつた子供が待ち兼ねて入る。午後の手技も終つてお片付け當番は鐘

の組、手別けして腰掛を机上にのせる。草履のぬき放し、忘れた帽子、クレオンの缺けまでも拾ひ集める。貼紙帳の積み重ねたるを糊猪口を保姆室に運ぶ。お庭の遊戯具もそれ／＼取り纏めて當番の一同行は受持保姆のもとに集つて、さよなら。御苦勞様。

威勢よくかけ出す男兒、優しくつれ立ちて歸る女の兒。

* * *

一同を送つて後の保姆室は、それ／＼に其日の子達の可愛い現はれを語り合ふのが例ならぬ例となつて居る。

断片

「ぼか〜と注意力のない無邪氣な、いたづらう子のKちゃんをとりまして、尋常科の子等が遊んでゐた。「Kちゃんには母さんがいな」こんな言葉をふと私は耳にとめて

日頃のKちゃんの事に何となく思ひあたるふしがあつた。そんな子等の群から静かに連れ出して、私はしばらくKちゃんと遊んだ。そしてあとでこんなことを云ひあつた。

「Kちゃんのお母さんはいないの？」
「うん」
「亡くなつたの？」
「うん、しんだ。今頃のくらい時に」「今頃のくらい時に？」
「うん、それに赤ちゃんもしんだ。」

「まあ、ちやKちゃんはお父さんやおばあちゃんと居るのね、Kちゃんはみんなの云ふことをきかなきやいけないのよ。そしたら大きくなつたらえらくなりますわ。」

「うわ(自分)海軍になるんぢや」とうれしさうにさけぶ。

ニコ～したこのじたづらつ子は、ほんとに海軍兵にでもなりさうだ。と今までほゝえむ。そんなことからKちゃんは何となく私の言葉をきゝわけてくれるやうになつた。

止めない。

突然、その前のお席にゐたRちゃん、たまりかねて「せんせい、Mさんはね、さつきからひとりで笛をふしてよろこんでゐるのですよ」まじめな愛らしい聲がひゞきわたつて、みなは笑ひがこみ上げてきそうになり、Mちゃんはいそいで笛をしまつた。

私の談話がすむと女子が「お遊戯しませう」と云ひ出した。色々の都合でこの頃あまりして居ないのであつた。男子は自由に遊びたさうなので別にして女子ばかりで輪をつくる。マーチにつれて元氣にすまして歩むことは一、みんな揃つて餘念もない動作の愛らしさ。いつとはなしに男の子が集まつてきた。ふだん我が儘ばかりする子供達までが樂しそうにおとなしく寄つてきて眺めてゐる。

* * * *

「自然にまかせて」今はなしMおぢーさんから伺つたなつかしいことば——。折にふれでは思ひ出す。いとけない多くの人々に無理であつてはならない。しらず／＼自分勝手なことを幼いひとの上に強いては居ないだらうか。あせらずにゆつたりとみつめる心を私はもつと／＼持ちたい。お角力が好きな元氣で上品だつたおぢーさんの笑顔をおもひうかべて、今日もしみぐと思つた。



お坐りの時間——みんな静かになつたとき——Mちゃんひとり、家から持つてきた長い笛をピューッ／＼と吹いて

第四回全國幼稚園關係者大會

去る十月十七、十八、十九日の三日に亘つて、岡山市に開催せられた全國幼稚園關係者大會に於ける諸問題は左記の通りである。全國よりの來會者約五百名、秋晴れの好天氣は三日を通じて頗る盛會であつた。

第一日

文部省諮詢案

一、談話及手技ニ就キ保育上最モ適切ナリト認ムル要目如何

議題

一、幼兒教育ノ振興ヲ期スル爲メ速ニ幼稚園ニ關スル法令ノ改定セラレンコトヲ其筋ニ建議スルコト（大阪市保育會提出）

説明

輓近教育ノ趨勢ハ幼兒教育ノ伸展ヲ促スノ切ナルモノアリ然ルニ現今法規ノ定ムルトヨロ動モスレバ之ニ伴ハズ保母ノ待遇資格等依然トシテ蕭条ヲ脱セズ引イテハ幼兒教育促進上支障ヲ感ズルコト亦妙シトセズ之レ本案ヲ提出シテ其改定ヲ促ス所以ナリ

二、公立幼稚園保母ニ小學校教員同様年功加俸令ノ制定ヲ其筋ニ建議スルコト（熊本市新幼稚園提出）

理由

幼稚園ニハ從來小學校又ハ公立學校教員同様年功加俸ノ制度ナシ依テ保母既遇上加俸令ノ制定ヲ望ム

三、保育事業ヲ普及セシムル適當ナル方法如何（京都市保育會提出）

説明

義務教育ノ延長實施及地方財政ノ緊縮ニ伴ヒ既設ノ幼稚園ニシテ廢園又ハ休園ノ止ムナキモノ若クハ新設計劃ノ中止セラル、モノ往々ニシテ少カラザルハ保育事業ノ發達上甚遺憾ニ堪ヘザル所ナリトス人生初期ノ基礎教育タル本事業ノ普及及發達ハ本邦文化ノ發展上最重要ナル關係ヲ有ス各地相協力シテ之ガ普及ノ策ヲ講ズルハ眞ニ刻下ノ急務ナリト信ズ是レ本案ヲ提出スル所以ナリ

四、幼稚園保育事業ヲ家庭内ニ普及セシムル方法如何（京都市保育會提出）

説明

保育事業ハ母ノ仕事ノ延長トモ見ルベキモノニシテ其ノ事業ヲ家庭ニ逆戻ステフ事ハ如何ニモ矛盾セルが如キ感アレドモ廣ク現今ノ家庭ヲ通觀スルニ家庭ガ幼稚者ヲ取扱フニ於テ如何ニモ不合理ナル點多々アルヲ見ル若シ彼等母姉ヲシテ保育事業ノ大意ナリトモ會得セシメ得バ幼稚者ノ取扱ヲ誤ルコトナク正シク教育ノ基礎ヲ體キ不良ノ傾向ヲ防止スルコトヲ得ン故ニ今日幼稚園設立ノ必要ト同時ニ家庭内ニ其事業ヲ普及セシムル事ノ緊要ヲ叫バザルヲ得ザルナリ果シテ其要アリトセバ其ノ方法ハ如何ニスペキカ其意見ヲ發表シテ以テ幼稚園保育事業從事者が自己事業ヲ中心トシテ此ノ事業ノ普及ニ力ヲ致サレンコトヲ切望スル趣旨ニ依リ此ノ問題ヲ提出ス

研究發表

一、幼稚園兒童ノ目測ニ關スル研究

其一 神戸市神戸幼稚園

二、同

其二 神戸市神戸幼稚園

第二日

議題

五、全國幼兒中等發育標準ヲ調査シテハ如何（京都市保育會提出）

説明

全國幼兒ノ中等發育標準ヲ調査スルコトハ幼兒保育ノ参考資料トシテ最モ必要ナリト認ム
六、保姆ニ適シタル服裝如何（神戸市保育會提出）

（イ）從來ノ服裝ノ可否　（ロ）洋裝ノ可否（可トスレバ更ニ儀式用ハ如何ニスペキカ）　（ハ）他ニ改良シタル服裝ノ有無
（ナルベク實物又ハ雑形ノ御指示ヲ願ヒタシ）

七、各府縣市ニ保育會設立ノ件（大分縣保育會提出）

理由

（一）幼稚園教育ノ權威ノ發揚ト改善發達ヲ圖ルコト　（二）各國相互ノ氣脈ヲ通ジ保育上ノ研究ヲナン兼テ親睦ヲ計ルコト

八、園兒保育上幼稚園ノ家庭及社會ト聯絡提携スペキ主要點如何（名古屋市保育會提出）

理由

家庭並ニ社會ノ影響ヲ蒙ルコト園兒ノ如ク大ナルモノナシ而シテ保育上母親ト保姆トノ間ニ於ケル交叉關係及一般社會トノ接觸

九、藝術教育上幼稚園ニ於テ施設經營スペキ事項如何（名古屋市保育會提出）

理由

眞ノ藝術教育ノ培養ハ其萌芽ヲ幼兒時代ニ求メザルベカラズ而シテ藝術教育ノ唱導ハ近時文化ノ進進ニ伴ヒテソノ高潮ニ達セラ
ルモノ、如シ之ヲ以テ幼稚園ニ於テ適切ナル方法ヲ講ジ其基底ヲ据ウルハ緊要事ノ一ナリト認ム

一〇、幼稚園ノ夏期休業ヲ廢スル可否（島根縣能義郡安來幼稚園長提出）

説明

幼稚園ハ學校ト異ナリ學習セシムル所ニアラズシテ訓育養護ヲナス所ナリ而シテ學校ニ於ケル生徒兒童ノ如ク自治的ニ學校教育ノ方針ヲ保持スルコト難ク全ク平素ノ保育ヲ無效ナラシムル恐レアリ當國ニ於テハ本年試ミニ之ヲ廢シテ午前中出席セシムルコト、セシニ成績著シク良好ニシテ父兄モ亦大ニ歡喜セリ只保母ニ於テ小學校教員ノ休養セルニ比シ幾分不快ノ傾向ナキニアラザルモ園兒ハ小學校兒童ノ休業ニ對シ何等ノ感ナク日々嬉々トシテ出席セルヲ見ル仍テ全國幼稚園ハ一齊ニ夏期休業ヲ廢スルコトニ協賛セラレントコトヲ望ム

研究發表

三、露天保育ノ實際ニ就テ（大阪市保育會）

四、手技畫用紙製作ニツキテ（靜岡縣私立靜岡櫻花幼稚園設立者 林 叉子）

五、幼兒ノ夢ニ就テ（岡山市内山下幼稚園長 高原 寅）

六、幼兒ノ口腔衛生ノ實施ニ就テ（大阪市保育會）

七、幼兒身體發育上ニ就テ氣付キシ事項（岡山市立幼稚園）

八、幼兒ノ素質測定ト教育上ノ試ミ（岡山縣女子師範學校附屬幼稚園）

談話題

一、異常兒ノ取扱方ニツキ現ニ施設セラル方法並ニ將來ノ御意見御希望等承リタシ（大阪市保育會提出）

講演

講師 東京女子高等師範學校教授 倉橋惣三君

第三日

諮詢案及議題

(上)

泰西名家幼稚園觀(三)

記者譯

— Will Levington Comfort.

すべての人々にとつて、幼稚園の實際を見て、考へる事は良い事だと思ふ。此處では子供達は多種多様に興味を起させ
るよう^に計劃されてある事物の眞中に自由に於かれてゐる。室内にはどよめきがあるが、それは不調和な聲ではない。子
供達は彼等自身である事を、そして彼等自身を發表する事を、獎勵されてゐる。決して隣人を防げないで、然し最も強くそ
の心を惹く事物の中に、彼等自身を没入するやうに。蓋し、今日の米國に於ける最も偉大な教師の或者は幼稚園の教師で
ある。

彼等は質に於て選ばれたといふのではない。彼等はをしへる事の眞實に觸れてゐるからである。さういふ小さい者に於

ても尙理智より深い應答^{エイダク}のあることを彼等はみて來た。

若し、かの初學年に實行された大きな理想が、七年間つゞけらるるならば、かよう導かれる人々は、こぞつて、慾をすべてた。平和なあかるい人生を得るに至るであらぶ。彼等は世界を、より住みよい場所にして、次の時代へ渡すであらぶ。

—Nicholas Murphey Butler.

教育過程の一極端、幼稚園と大學、とが個人主義の最も大なる二つの保管者であるといふ事は、凡ての教育に於て今日見出される處の、著しき事實であり、最も希望の多いきさしである。

我々の學校系脈に於ての、大なる望は、個人主義精神が、始めは幼稚園から、終りは大學まで動いて來てゐるといふ事實に於てである。然して他日この兩端からの運動傾向は會致して、彼等の勢力の中に、全教育過程を支ふるに至るであらふといふ事實に於てである。

第四回全國幼稚園關係者大會狀況の御報告

市川みち

思ひがけず突然に、第四回全國幼稚園關係者大會への出張命令を受けたのは、迫るにも迫つた十月十一日の午後でした。この夏お茶の水に開かれた講習會の折、秋西の地に大會のあることを承知して、かすかな出席の希望をもたなかつたことはないのですが、實現を想ふには、餘りに遠距離に過ぎ、その上小さい私にはかけ離れたことでしめたから、心にも懸けずに居りました。處へのこととのあつたのは誠に意外のことでした。

東京市よりの出席者は、小川圓次郎先生と私の二人で、何もかも先生を頼みに、十六日朝下關行の特急で東京を立ちました。須磨より先ははじめてでしたが、夜になつたのでその眺も得ず、午後十一時三十分岡山驛につきました。

第四回幼稚園關係者大會日程

(會場 岡山市深姫尋常高等小學校)

驛には係の方のお迎へがあり、驛前には會の事務所が設けてあつて、直ちに來會者を受付、宿の事までお世話下さるなど、到着勿々先づ主催地の方々のお骨折を思ひました。翌十七日は大會第一日でしたので、各地よりの出席者の大部分は既に着岡せられ、其處此處の宿屋には、それらしい人々の影を澤山に見ました。先づ日程を掲げ、後順を逐ふて申上げることに致します。

第一日(金曜日) 午前九時開會

一、開會式

二、議長選舉

三、報告

四、議事

1 文部省諸問案

2 議題(自第一題 至第四題)

五、研究發表(自第一 至第二)

午後二時招待會 會場 後樂園鶴鳴館

第二日(土曜日) 午前九時開會

一、議事

1 議題 前日ノ續キ及ビ(自第五題至第十題)

2、研究發表(自第三 至第八)

3、談話題 第一題

4、講演(午後七時)

講師 東京女子高等師範學校教授 倉橋惣三君

第三日(日曜日) 午前九時開會

一、議事

諮詢案及議題 前日ノ續キ

正午 招待園遊會 會場 東山公園

第四回全國幼稚園關係者大會狀況の御報告

第一日 午前九時三十分開會

主催 岡山市教育會

◇開會式 議長選舉及報告

吉備保育會長國富友太郎氏教育勅語を捧讀せられ、續いて主催者側を代表して開會の辭を述べ、次で大海原知事、塙原市長、中原中國民報記者の祝辭があつて日程に入り、先づ議長選舉を行ひ、國富友太郎氏を推薦し、滿場一致之を可決、次に客年大分縣に於て開催せられた。第三回全國幼稚園關係者大會の後始末につき、大分幼稚園長立花一雄氏の報告があつて議事に入りました。

◇議事

1、文部省諸問案二議題

談話及手技ニ就キ保育上最モ適切ナリト認ムル要目

如何

本案に就き、永島岡山師範學校長は、文部省の依託を受け説明する處あり、之に對し大阪市高津幼稚園長の田村女史並に神戸市楠幼稚園長の山崎女史から夫々意見の發表がありました。此の時議長から「答申案の作成方法を諮る」と

の動議の提出があつて、満場之に賛じ、議長の指名により委員を選抜し之を附託することに決し、左の七氏を委員に舉げ、其の研究方を一任致しました。

森川正雄

山岡爲

田村好

山崎とまの

浦野みち

英賀春子

今西四良

續いて各所よりの提出に係る議題の審議に移りました。

二、議題

(一) 幼兒教育ノ振興ヲ期スル爲メ速ニ幼稚園ニ關スル
法令ヲ改定セラレンコトヲ其筋ニ建議スルコト

(大阪市保育會提出)

を議題として、大阪市視學村田氏提出理由を説明し、審議に入らるとした時、

(二) 公立幼稚園保母ニ小學校教員同様年功加俸令ノ制

定ヲ其筋ニ建議スルコト（熊本市一新幼稚園提出）
は本議題と其の趣旨を同じくするものであるから、一括して討議しては如何との動議を出すものがあつて、満場異議なく之を可決し、討議に移り、(一)(二)題共原案通り可決致しました。

(三) 保育事業ヲ普及セシムル適當ナル方法如何

(京都市保育會提出)

京都市田村作太郎氏の説明あり、一二三質疑應答の後、福島縣杉山政治氏は登壇せられ「幼稚園事業を普及せしむる爲に、其の手段方法を研究することは焦眉の急である」と前提して、「縱の連絡としては文部省、小學校に、横の連絡としては家庭、社會に、一聲に宣傳しなければならぬ。亦保母の養成機關も全國的に制度を設くべく、運動を起すべきである」と述べ、大阪市大西女史は、民衆を背景とした保育事業を振興させたい。と云ふ意見の下に二三この種の經驗談を述べられ、亦神戸市坂本女史は日曜幼稚園の實驗談を、尙亦同市西氏は、嘗て兒童愛護聯盟に於て試みた宣傳の一、二の實例及賴母子的幼稚園、會社的幼稚園等の經

驗談をせられ、吾々の使命の重きを説かれ意見を結ばれました。此の問題は性質上中々容易に決定せらるべき事項でありますんでしたので、向後互に相當研究を重ねることゝし、何等の決定を見るに至らずして終りました。

(四) 幼稚園保育事業ヲ家庭的ニ普及セシムル方法如何
(京都市保育會提出)

提出者の説明あり、大阪市山村女史は實驗談の後「駄菓子製造業者と相當の連絡をとり、良質高稚であつて幼児の心氣に投するものを作らしむる様努ることは、決して幼児保育上輕視すべきことではない」と述べられ、神戸市の大西氏は玩具展覽會の効果を發表せられ、尙幾多の異つた意見の發表を見るの有様でありましたので、大分縣の澁谷氏は議事の進行に關し動議を出され、會員皆之に賛成せられて可決、ことに豫定の議題の審議を終り、之より研究發表に移りました。

◇研究發表

園児の目側に關する研究

この研究は神戸幼稚園に於てせられましたので、同園

の松永、小倉兩女史が發表の任に當られました。それは被試驗者に線の一等分點を求めて、その誤差を計り、園児の目側の正否を定むると云ふもので、凡て表によつて明瞭に現はされて居り、詳細なものであつて、相當時間も要せられ、中々御苦心の研究の様に見受けられました。軽て議長より散會を宣せられたのは、午後一時二十分でした。

二時からは日程に掲げてあります様に、後樂園の鶴鳴館へ御招待を受けて居りましたので、晝食を済まして直ぐに後樂園に参りました。先づ吉備樂（演奏者岡山市尾原音人氏外數名）によつて、吉備舞、櫻井驥楠公父子の訣別及足柄山が演ぜられ、續いて園を一望に納むる大廣間に饗宴は張られ、紀念品備前焼の觀世音菩薩の像などを贈られ、何れも歎を盡し四時半散會し、第一日の日程を終了いたしました。

第二日 午前九時開會

前日に引き續ぎ議題の審議に入りました。

◇議事

(五) 全國幼兒中等教育標準ヲ調査シテハ如何

(京都市保育會提出)
例により提出者の説明があり、一二三の質疑があつて討論に移りました處、意見が區々で中々纏りさうもありませんでしたが、最後に名古屋市の町田氏から「文部省に建議すべし」との動議が出て、採決の結果可決した。本案の審議は終りました。

(六) 保母ニ適シタル服裝如何

(神戸市保育會提出)

本議題に就き提出者望月女史は、(イ)從來の服裝の可否

(ロ)洋服の可否 (ハ)適當なる有無の三項につき諮り度

いと説明せられ、直に討議に入り (イ)は起立により過半

數を以て從來の服裝は否と決定し (ロ)(ハ)は之を一括して審議致しましたが、甲論乙駁意見の一一致を見るに至らず、終に議事の進行に關する動議が出て、議長より議事打切の提案があつて、滿場異議なくこれに決し、未決の懇議事を打切ることになりました。次には

(七) 保育會設立ノ件 (大分縣保育會提出)

が提議せられ、出題者たる大分縣の天門氏は、其の提案理

由を説明するに當り、諸種の方面より其の設立の緊切なるを力説し、會同は大に動かさるゝ所がありました。後二三の質問があつて討論に入りましたが、即決説も出れば手段方法を問ふの動議も出る、經驗談が出れば既設保育會に就ての質問も出る、と云ふ有様で、終に何等の具体案の成立を見るに至らず、結極一日も早く保育會の設立せられんことを望む、と云ふことに落付き、本問題は終結いたしました。

(八) 園兒保育上幼稚園ノ家庭及社會ト聯絡提携すべき主要點如何 (名古屋市保育會提出)

提案者名古屋市町田氏提出の理由を説明し、一二の質問あり討論に入り、大坂市膳女史は幼稚園と家庭との連絡をよくするには「家庭の者が最も心易く園に出入出来るやうに努めねばならぬ」と前提し、經驗談をせられ、京都市の早川氏は「各園種々の方法を講ぜられてのことと、思ふからそれを小冊子として配布しては如何」との動議を出されましたが、費用其他の點につき反對論多く否決となり、本問題は討議に附したのみで、終結に至りませんでした。

(九) 藝術教育上幼稚園ニ於テ施設經營スペキ事項如何
(名古屋市保育會提出)

提出者町田氏は出題理由を説明するに當り「眞の藝術教育は幼兒時代に求めなければならない。而して茲に云ふ藝術とは美に對する創造と云ふことである」と論斷し、尙言葉を次いて「幼稚園に於ける藝術教育の一般施設を如何にすべきか、又保姆は藝術に對し如何なる程度の理解を要すべきか、の點につき論議せられ度し」と述べられ、之に對し大阪市の辻女史は「幼兒の生活は總て藝術である」と前提し、これよりよく指導せんには二つの方法がある。即ち「は園児の鑑賞力を養ふことで、他の一は其の創作力を養ふことである。而して前者の爲には、幼稚園に名ある繪畫、彫刻等を備へ、隨時園児に之を示し、或は樂聖の名曲を聞かしむる等の方法を講ずることで、後者の爲には、手技、描き方等を授け、之により其の萌芽を育むことである。指導者も之に對し充分の用意を必要であるは勿論である」と意見を結ばれました。

此の問題につき、提案者の町田氏は委員附託説を出し、

種々主張せられましたが、成立せず、晝食の爲一時休憩し午後も引き續き討論を開き論議せられましたが、何ら歸一する所なく、遂に岡山市の河本氏の「本問題は重大問題であるから、慎重なる研究を要すべくを以て之を留保すべし」との動議により、討議未了の儘次の議事に移りました。

(十) 幼稚園ノ夏期休業ヲ廢止スル可否

(島根縣能義郡安來幼稚園長提出)

提案者並河氏は「園児は生徒及兒童のやうに、自治的に學校教育の方針を保持することは難しい。これ故に夏期休業中に、平素保育の効を無にする惧れがあるので、自園では今夏休業を廢してみたが、非常に好結果であった」と経験談と共に提案の理由を説明せられ、討議に入り、福井縣の森下氏は「幼兒は小學校兒童より以上の者より身體が虚弱であるから、酷暑の候に於ける休業は必要である。又保姆としてもこの期間に修養静養の機を得ることは必要である」と述べられ、亦大阪の稻葉女史は「保姆が職業の爲に受くる生活の缺陷を償ふ唯一の時期を失ふのは、一大問題である」と反対意見を表示せられ、町田氏も設備等を理由

として反対せられ、兵庫縣の日野女史は「地方又は家庭の状況、園の設備等により一概に可決することは難かしい」と穩かに反対せられる等、異論百出の状ありました。この審議打切の提議がありまして、大多數の賛成する所となり、終に可否を決定するに至らず、討論を終結いたすことになりました。

次には日程二に掲げられた研究發表に移りました。

◇研究發表

(一) 露天保育ノ實際ニツイテ (大阪市保育會)

發表に先立ちて村田大阪市視學は、此の研究はまだ日も

浅く、到らない箇所も多いものであるから、御含みの上聽取ありたし、と釋明的に希望を述べられ、續いて同會代表者から松川女史、大正十年の秋、大阪近郊の生活程度の低い處に於て始められたと云ふ、露天教育の實際についての説明がありました。

(二) 手技書用紙製作ニツキテ

(静岡縣櫻花幼稚園林教子氏)

と題して林女史は、其の創案に係る、書用紙にて最も簡

折井女史は、同園に於て實見せられた多くの事實を指摘せられ、保育上如何に考慮を要すべきかを詳細に説明せられました。

單に作り得る手技を照會されました。同時に配布せられた印刷物には、右に關し、「(一)教育的分類 (二)價値及長

(三)誘導方法等に就き明細に記されて居り、この種の研究發表としては誠に珍らしく實際的のものであります。

(三) 幼兒ノ夢ニ就テ (岡山市内山下幼稚園長高原寅)
高原女史は幼兒の潜在意識を知つて、教育の徹底を期さうとして、夢の研究をしてみたものであると述べられ、併せて研究の實績等を發表せられました。

(四) 幼兒ノ口腔衛生ノ實施ニ就イテ

(大阪市保育會)

此の研究は、大阪市船場幼稚園の金谷女史が、同園に於て實驗せられた事項についての發表で、實施の動機、方法、結果等に關し、表を配布され詳細に説明せられました。

(五) 幼兒身體發育上ニ就イテ氣付キシ事項

(岡山市深抵幼稚園)

(八) 幼児ノ素質測定ト教育上ノ試ミ

(岡山縣女子師範學校附屬幼稚園)

同園の岡女史發表の任に當られ、同園に於て、數年間行はれたメンタルテストによる知能年齢の表を示し、測定の方法、結果等について明細せらるゝ所がありました。

これにて研究發表を終り、續いて談話題に移らうとした時、「會員に疲勞の様子あれば、談話題は明日に譲り度し」との動議出で可決、午後三時三十分に散會致しました。

◆講演

午後七時からは、倉橋惣三先生の講演がありましたので、

折悪しくも夕方から降り出した雨の中を會員は亦講堂に参りました。演題は「現代の教育思潮と幼稚園」と掲げられ其の要領は、現代の教育界の思潮は、幼稚園教育も小學校中學校及大學の教育と同等の地位に於て考慮せらるゝ様になつて、特別の教育機關として考へられた時代は既に去つて居る。然るに幼兒教育の實際家は其の思潮に後れて居て幼稚園に於ける幼兒の生活の觀方に於て、何とはなしに、禾だの所謂幼稚園らしい細かさに過ぎるものゝ中に置か

れて居る。と述べられ、尙言を次いで、吾等幼兒教育の衝に當るものは、一日も早く此の形骸の中より脱して、新しい意味での幼兒教育の實際家として立ねばならぬ。と講演を結ばれました。此の講演は本會の當初より、會同の總てが多大の期待を持つて居つたものでありますので、何れも満足の色をたゞへて散會したのは十時過でした。

第三日 午前九時開會

◆議事

(一) 全國聯合保育會設立ノ件

(東京市保育會提出)

前日に引き續き日程により議事に入らうとした時、東京市仲之町幼稚園長小川圓次郎氏は、制規の賛成を得て「全國聯合保育會設立の件」を附議すべく緊急動議を提出せられ、我國の保育事業の進歩發達しない理由は多々あるが、其の最たるものは、全國に統一せられたる保育事業に關する機關のないことである。幼稚園令の獨立、恩給令の改正等促進を要する問題は中々多い。而して是等の問題を解決し幼兒教育の目的を達成せんが爲には、どうしても全國聯合

保育會の設立を要すると信ずる。故に本案を提出して御賛成を乞ふ次第である」と提案の理由を説明せられ、大分縣別府幼稚園の高田氏は、賛成意見を述べ、尙この運動方法としては、三市(京都、大阪、神戸)聯合保育會に於て、設立迄の事務を取扱はることとして如何と提議し、大阪の村田氏は、提案者たる東京をも三市聯合保育會に加ふべしと提議し、一三賛成意見の發表あり、満場一致を以て全國聯合保育會設立の件、及之が設立に關する事務運動を東京保育會及三市聯合保育會に於て致すの件を可決し、本議案の審議を終りました。

(一) 文部省諸問案ニ對スル答申案ノ件

第一日に委員附託になつて居りました答申案の審議に移りました。委員長森川氏は、委員會の經過を報告すると共に、原案(後掲)に就き詳細な説明をせられ、「三質問の後討議に入り、先づ大阪の村田氏「答申原案は知識保育に遍するの感がある。けれどもこれは自分一個の考であるかも知れないから、速に原案の可決を望む」と述べられ、續いて神戸の望月女史も村田氏と同意見を發表せられましたが、

賛成者少く、原案反対の意見が盛であつて、終に原案修正の動議が出て、結局大阪の村田氏、神戸の望月女史を委員に加へ、今一應原案を練り修正の上再審議することに決し委員は直ちに委員會を開き、熟議を擬らし、再び本會議に臨み、委員長森川氏は「原案は字句の適切でない爲に、多少誤解を招く點はあるが、大體に於て諸君の御主張と一致して居ると思ふ。尙時間も接迫して居ることでもあるから追々委員會に於て右字句の修正を爲し、成案を得て答申すること」とし、總て委員にお委せありたし」と述べられ、衆議も之を容れ、委員希望の通り一決し、答申案の審議を終りました。

(二) 保母恩給令改正促進方法ニ關スル件

本件は緊急動議として、神戸市保育會の提出したもので同市の村田氏は其の提案理由を説明するに當り「從來この問題は幾度か文部省に向つて建議せられたものであるが、いつも事實となつて現はれたことはない。このやうなことを續けてゐては、幼稚園事業の振興にもかゝることであらから、此の度は實現を期して、何とかよい方法を講じた

い」と述べ、政府より法律案として次期議會に提出せしむる様、衆議院議員に之が促進を依頼するの件を提案せられ、満場異議なく之を可決し、各地の衆議院議員に可然運動を開始することになりました。

◇談話題

一、異常兒ノ取扱方ニツキ現ニ施設セラル、方法並ニ將來ノ御意見御希望等承リタシ（大阪市保育會提出）

右につき、出題者は簡単な説明を試みた後、発表を求められましたが、幸うじて一二、三の経験談を得たのみで打切となり、大會日程に掲げられた事項は、これにて全部終了いたしましたのでございます。

議長は閉會式に先立ち、次回開催地を名古屋市とするの件を満場に諮られ、異議なく可決し、大正十六年に於て開催せらるべき、第五回全國幼稚園關係者大會は、名古屋市に開かれることに決定いたしました。

閉會式

岡山市視學谷口氏は、同市教育會を代表して挨拶せられ、國富氏閉會の辭を述べ、大阪市視學村田氏は、會員を代表

して謝辭を述べ、茲に第四回全國幼稚園關係者大會は全く終りを告げたのでございます。

午後よりは、岡山市教育會主催の園遊會が、東山奥市公園に開かれ、會員一同御招待を受けて居りましたので全員之に出席、同市名物の吉備團子、桃太郎しるこ等の御馳走を受け、午後三時散會いたしました。

私は今此の報告を書き終つて、その時のことどもを追憶いたしますのに、誠に内容の充實した三日間でした。そして總ての事々は皆新しい経験でございました。従つて教へられるところも亦澤山でございました。關西各地の方々の幼兒教育に對し御熱心であられた事、先輩の皆様の真摯な御態度等には、全く感心の外なく、強い勵みの力を得ました。亦風をなして勃興しつゝある幼兒教育の思潮、幼兒教育に關する現行法制の缺陷等、今迄も思はぬではなかつたのですけれど、彌々其の感を深ふいたしました。

新參の保姆としての私には、全く刺戟の多い會でございました。不束な筆を活字にして、澤山の方々にお目にかけますことは、隨分厚顔かましいことゝ躊躇いたしましたが、編輯の方の断つての御勧めがありましたので、紙面をお惜するごとに致しました。（畢）

夢の國旅行

よしを作

(一) 頂いた梨

太郎さんは幼稚園から歸つて來ました。もう三時近くなんでせう。お母さんは、
「坊や、今日は大變おそかつたのね。」

とおつしやつた。けれども太郎坊は、

「今日はお迎ひも誰も來ないのですもの。僕一人で歸つて來たんですもの。つぎやはどうしたんですか? でも先生が自分のこととは一人でなさいとおつしやつたので、僕一人で歸つたんですよ。」

「さう、坊やはよく一人で來ましたと見へて、お迎ひの間に合はなかつたのですよ。でもよく一人で來ましたね。お隣の花子さんのお迎ひと所に來るかと思つて居たんですよ。」

「花子さんはね、お女中と三越へ行つたんですよ。僕一人で來たんですよ。」

「花子さんは一緒に行きませうと云つたけれども、僕、お母さんが待つてゐるから、一人で歸るよと云つて歩いて來たんですよ。」

「さうですか、坊やはよく来ましたね。ほんとうに！」

お母さんは、太郎さんが一人で歸つて來たので大變嬉しがつて居ます。もう坊やは一人であの遠い幼稚園から一人歸れたかと思ふと嬉しくてなりません。もう三時近くだ。何か坊やにやるものはないか知ら！

お母さんは、つと御勝手の方へ立つて行かれました。歩いて居る中にも母は「あの三十町もある遠い所から電車にものらず、坊やは歩いて來たのか、自分がもつと早く迎に行つてやればよかつたにと思つたが、衣物が仕掛けたものだから、よく行かなかつた。誰れかと一緒に來ると思つて居たのが間違ひであつた。けれどもよかつた、坊やは一人で怪我もせず歸れてよかつた。」と云ふ様なことを考へて居た。それで今朝方靜岡から頂いた梨を坊にやらうときめた。そして大きなのを二つ三つ持つて來て、

「坊やが今日一人で歸つた御褒美に、今朝方靜岡から頂いた梨を坊に上げませう。」

とおつしやつた。太郎さんは嬉れしさうな話をして梨を見ると、大きいこと、大きいこと、實にすばらしく大きい。太郎さんは思はず、

「お母さんありがとうございます。皆頂けるの、一つはお母さんに、一つはお父さんに、赤ちゃんは小さしからおつぱい。」

と叫び立てた。するとお母さんは、

「皆んな坊やに上げますよ。お父さんはまだ他にありますから、お歸りになつたら、お母さんはお父さんと一緒に頂きますわよ。」

とおつしやつた。太郎さんは三つ、自分の顔より大きな梨を頂いて、ニコニコ顔です。お母さんは太郎さんに一つむいて上げました。太郎さんはおいしさうな、水のしたゝるやうなのを瑞から、おいしいおいしいと云つて頂いて居ます。

とうとう太郎さんは、大きなのを一つ平げて仕舞つた。お母さんはさも満足さうな顔をして、一生懸命に着物を縫つて

居られます。

太郎さんは、

「お母さん。僕ちうお腹一杯ですよ、お父さんの御歸りまでしまつて頂戴。」

と云ひながら、今日樂しく遊んで來た幼稚園の遊戲のことを考へ始めた。すると、三十町の長い道を歩いて來た疲れが出て、太郎さんはとうとう、コクリコクリ眠り始めました。お母さんは風を引いてはいけないと云ふので、太郎さんにお蒲團をかけてやりました。

(II) 山中の仙人

太郎さんが幼稚園の事を考へて居る中、ひよつとあたりを見廻はすと、紅や黄に染つて居る綺麗な山が見へる。あんなといふ綺麗な山だこと。水も綺麗だ。底まで見へる。「どうして自分はこんな所に來たのか知らん。」と考へたが分らぬ。唯眼に見へるのは谷川の岸に咲いて居る綺麗な桔梗、カルカヤ、女郎花ばかりである。一つ取つて来て隣りの花子さんに上げませう。僕のお室へも挿しませうと考へながら、川の堤に添うて、太郎さんは山の方へ、山の方へと行くのである。

太郎さんは、花を取るので一生懸命です。川の上へ行けば行くほど、綺麗なのが咲いて居ます。夢中になつて花を取りながら川上へ上つて行きます。ふとあたりを見ると、もう自分は紅や黄の木の林に來て居るのです。

「あゝ綺麗なこと。」太郎さんはこゝ云ひながら、取つた花の綺麗さと見比べるのです。その中にどこからともなく風がそよそよ吹いて來てよい氣持です。その中に林の中の草が何だかガサガサと音がして來て、誰か人の來るやうな氣がします。太郎さんはひょいと顔を上げますと、それはそれはまつしろな髪の毛をした、お鬚が地面までつくほど長い、顔のま

つかな老人が一人立つて居ます。

「太郎さん。何して居るの。」ときくのです。太郎は、

「僕、花子さんにやつたり、自分のお室にさす花を取つて居るの。」と答へた。すると件の老人は、「それはそれはよい心掛だ。自分一人のためでなく、花子さんにも！ 太郎さん一寸ここまでお出でよ。口の廻りに何だから黄色いものがついて居るから、とつて上げやう。」と云ふ。

太郎さんは、おとなしく側に行つて顔を出した。すると老人は長い爪した手で太郎さんの口のまはりをなでゝ呉れた。その間にも太郎さんはかう考へました。あんなに長い爪が、まるで牛の角の様な爪が顔にあたつたら、顔が二つにさけて仕舞ふかと思へば、時々顔を後へのけずには居られません。ビクビクものであつたが、とにかく老人に口の廻りをさすつて頂きました。太郎さんは、

「おぢいさん何に！ 僕の口のはたに何がついて居たの？」と聞きながら、老人の顔をつくづく眺めて居た。すると、老人は、

「女郎花の花粉でせうよ。」

「さう、女郎花の花粉！」

さう云ひながらも、太郎さんは老人の顔をつくづく見て居るのである。すると、どうした事か？ 老人は口のまわりを自分で二三回撫でたかと思ふと、その口が段々のびて来て天狗さんの鼻と間違へるほど長くなつて來ました。おかしいではありませんか。その口が鶴の口バシの様に真中から一つに割れるのですよ。さあ、これを見た太郎さんはビックリして仕舞ひ、逃げ出さうとすると、老人は聲をかけて、

「太郎さん。そんなに逃げなくてもいいよ。君だつて、俺の様な口になるのではないか。君の口を手で一回さすつて延し

て御覽。」

と云つた。太郎さんは本當かと思つて延して見た。すると不思議ではありませんか、太郎さんの口も老人の様に、グングン伸びて、天狗の鼻をたてに割つた様な形となつた。すると老人は太郎さんに、

「君！ わしのする通りにして御覽。」と云つて、老人はその長い口で紅や黄色に染めた林の空を「ブツ」と吹いた。
どうです。驚くではありませんか、木に止まつて居る鳥も、カラスも、スズメも、木について居る紅や黄の木の葉も、皆嵐に會つた様に吹き飛ばされて仕舞つた。空高く飛んで居る鶯まで吹き飛ばされて、どこかへおつこちた様です。太郎さんも息を一杯すひこんで、老人の眞似をして「フウツ」と吹くと、木の枝や幹まで、嵐の黄風にゆられた様に大ゆすれです。

こんどは老人が、その長い口ですつと息をすひ込むと、さきに吹き飛ばした木の葉や鳥まで老人の足元に皆集つて、そこは非常にうづ高い木の葉の岡になりました。太郎さんや老人は、その木の葉の中にうまつて仕舞ひました。それで二人はやうやくにしてその木の葉の岡の上に這ひ上りました。その老人は太郎さんにも、息をすつて見なさいと云つたので、その通りすると、さきに飛ばした木の葉や、木の枝や鳥まで皆足元に來てヒラヒラして居ます。鳥なんかは魔法にかゝつたかの様に、眼をキヨトキヨトして飛んで行からとはしません。

こんどは老人が川の方へ行つた。そして大きな岩の上に立つた。そして、太郎さん太郎さんと呼んで呉れます。それで太郎はそちらの方へ行きました。すると件の老人は、その長い口を深い水の中に入れて、何か挿して居る様です。その中にその長い口を水の上にあげますと、大きな鮎が二十五も三十五も、その長い口に挿まれて居ます。太郎さんは面白くなつて、

「おぢいさん、ぼくにも教へて頂戴。」

と云ふと、老人は親切にその取り方を教へて呉れました。その上大切なものが深い川に落ちた時には、口を長くして捕かすとすぐ口で取ることが出来ると教へて呉れた。

それで太郎さんは、教はつた通りやつて見やうとしました。するといつの間にか老人は川の岸へヒョイと行つて仕舞つた。太郎さんが、

「おぢくさん、待つて下さい。」と云ふと、その老人は

「その口で君の足を吹け。」

と云ふのです。それで云はれた通りすると、太郎さんの身は山の頂山より高く舞ひ上がって、その老人の所にフワリと落ちて來た。それを見た老人は、一人で、

「よろしい、よろしい。」

と云つたが云はぬ中に、

「君、君の口を君の手で三遍左にまはして撫で給へ。」と云つた。それで太郎さんは云はれた通り、口の廻りに手をやつて左の方へ廻しかけると、その老人はどこへか消へて行つて仕舞つた。

(III) 家の人々の驚き

どこをどうして來たのか、太郎さんは家へ歸つて來て居ました。お母さんはお勝手で何かしていらつしやる様です。するとどうした調子かしらぬが、大事な大事な指輪をおかあさんが、大きな水ガメの中にお落しになつたのです。もう夕方なのでどうしても分りません。お母さんはアレどうしようかしら！ と云つて困つて居らつしやる。

すると太郎さんは、それを聞いて、

「僕、取つて上げやう。」と呟つた。

「なあに、僕なんかつて云つたとて取れるものですか。」

「いゝえ、お母さん、僕きつと、とるよー。」

「取れるものですか。」

等と云つて居る中に、太郎さんは自分の口のまはりに手をやつて、一二三遍まわすと、口が、長く長く、天狗の鼻を、たてに割つた様になつた。そしてその長い口を水ガメの中に入れると、初めてお母さんはそれを見て、驚いたの驚かないのつて、

「あー、あれ、坊や、なんですか。」

と云つて居る間に、太郎さんは、お母さんの指輪を長い口で拾ひ上げた。お母さんは喜ぶやら、驚くやら、大變です。

お父さんも出て來た。そしてその口を見ると驚いて仕舞つて、お醫者を呼んで來て切つて貰はなくてはと云ふ、太郎さんは落つたものです。

「お父さんや、お母さん、この口はまた元の通りになるのですよ。」

「何元の通りになるのですか。お醫者に行くのですよ。」と云つて、お父さんやお母さんは半分泣き顔して居らつしやる。太郎さんは又老人に教はつた通りに、三遍口のまはりを左にまわしながらなでました。すると元の通りになつたので、お父さんやお母さんはやつと安心しました。

日が暮れて夜になりました。夜になると、何時もフクロウが庭の銀杏の木に來ては、

「ホウホウ　ホウホウ」

と鳴きます。此の鳥が來て鳴くと、何時も赤ちゃんが泣き出します。お母さんの一番困まるのは、この赤ちゃんの泣き

出すことなのです。

太郎さんは又一つお母さんを驚かしてやらうと思つて、口を伸ばして、フクロウの鳴いて居る銀杏の木に向つて、息を思ひきり吹きかけてやりました。すると銀杏の木の葉は皆散つて高く空に舞ひ上り、フクロウは「キャツ」と云つたかと思ふ間なく、どこかへ吹き飛ばされて仕舞つた。隣の御家では風だと云つて大喧ぎをして戸をしめたり、乾し物を入れたりして居ます。道を通る人は旋風だ旋風だと云つて騒いで居ます。太郎さんはソフト口のまわりを三遍左にまわして撫でゝ平氣な顔をして居ます。もうそれからフクロウは一聲も鳴かなくなりました。それを見て居た家人たちは、まあそれはそれはほんとうに驚いて居ました。

(四) 太郎さんの空中旅行

そうして居る中に夜は明けて、あすの朝になりました。太郎さんは顔を洗つて御飯を頂きました。そして通りに出で見ると飛行機が空を飛んで居ます。自分も一つ飛んでやらうかと思ひながら、老人に教はつたあの術で口を長くして、足元をフットやると高く高く天に舞ひ上りました。

天に舞ひ上がつた太郎さんは、東京を真下に見下しながら考へた。こんな所に居ても一寸も面白くはないや。お父さんがおつしやるには、西の方で支那が戦争をして居ると云ふ事だ。一つ見て來やうと思つて行かうとした。までよ、西の方つてどちらか分らぬ。何でも幼稚園で先生がこんな事を仰つたのを覺へて居る。

「今では日本も大分大きくなつたので、汽車の通る鐵道を西へ西へと行き、下ノ關と釜山とか云ふ所を鐵道省の連絡線で渡り、日本の鐵道で朝鮮を横ぎり、そのまゝ支那の奉天と云ふ所に行けると。」

まし、鐵道のまん上を西へ西へと行かうと思つて、太郎君は空中を西へ西へ鐵道に沿つて行くのである。おや横濱の空

へ來たぞ。おや、金のシャチが見えるぞ。あれは名古屋か？

おや大きな湖、綺麗な山や、お寺の澤山あること。あれは琵琶湖か、これが京都か、よい所だな。

太郎君は鐵道に沿ふて、だんだん進んで行きます。

「おやおや、どうしたんだ。煙くて眼が開けられない。これはどこだ大阪か？」

太郎さんは飛行機より早いです。もう下の闇に来ました。こゝから西北へ飛びましたら、まもなく朝鮮釜山の空を飛び朝鮮の都京城から、とうとう鴨綠江と云ふ日本一の大きな河の空に来ました。こゝから西がいよいよ支那の土地である。戦争はして居ないかなあと思つて下を見たが、中々戦争は少しもない。もう一息かと思つて太郎さんは一息に西北へと飛びました。そして下の方を見ると、

「やあ、やあ、兵隊が居るぞ、一寸日本の兵隊と違ふな。」

「やあ居る居る、どこへかつれていかれるのだな、じくぞ、じくぞ、どこだな。」

「うむ、西南の方へ行くぞ行くぞ、そつと空から見てやれ。」

「おやつ、日本の兵隊も居るぞ、何をして居るのかな、あ鐵道の側にばかり立つて居て。」

「支那の兵隊は、どんどん西南の方へ行くな。」

「よし、僕も空からつて行かう。」

太郎さんは、山海關と云ふ所の空まで飛んで行つたのです。太郎さんが下を見ると、戦争をして居るは、して居るは、中々えらい元氣でやつて居る。これを見た太郎さんが何でちつと我慢が出来ませうか？

(五) 太郎さんの魔術

太郎さんは、先づ北東から大砲を撃つて居る軍隊の方へ來ました。そして誰が大將か聞きました。すると支那の兵隊さんは此方の方の大將はツアンツオーリンです。今此方の方が勝つて居るのですよ。と支那の兵隊さんは大いぱりです。その中に敵の方から毒ガスの弾を撃つて來ました。太郎さんの前の前で働いて居る支那の兵隊は、ごろりごろり倒れて仕舞ふのです。こんどはどうやら太郎さんの居る所があやふくなりました。太郎さんは早速老人から教はつた術で、口を延ばして「吹き」「フウツ」とやりました。すると此方に飛んで來た毒ガスの弾は、撃つた方へあべこべに飛んで行つて爆発しました。向の方の大將は不思議がつて居ります。毒ガスでも利き方が薄ないので、澤山な兵隊をして攻めさせました。それを見た太郎さんは又大きな口で一吹き「フウウツ」とやると、攻めて來た兵隊さんはどこへか吹き飛ばされました。これを見て居たツアンツオーリンの兵隊は、太郎さんをすつかり神様だと思つて、傍に寄つて來ません。遠くから拜んで居るだけです。

この様に敵兵が吹き飛ばされたのですから、日本の兵隊さんならすぐに突貫するのですが、支那の兵隊さんは中々突貫しません。それで太郎さんはすつかり氣を腐らして、長い口で足元をふいて又天に舞上つて、今度は西南から攻めて来る兵隊の所へ行きました。そして傍の兵隊さんにお前方の大將は何と云ふかと云つて聞きますと、支那の兵隊はウウペイフウと云ひました。

太郎さんはあまり名前がおかしいので、何遍も何遍も、ウウ ペイ フウか、ウウ ペイ フウかと云つて繰返しました。仕方が無いウウペイフウでもウスツペイフウでもよい。此處で戦争を見て居やうと云ふと、支那の兵隊さんたちは、こゝは大砲の弾が出て危いから、ずつと後へ行けと云ひます。けれども太郎さんは「なに大丈夫だい。日本男子だい。」

と云つて威張つて居ます。その中に大きな大砲の弾が來て、四十間位向ふの所で爆發しました。支那の兵隊さんたちは皆

小さくなつて仕舞ひます。それでも太郎さんは口を長くしただけで一向平氣なものです。その口の長いのを見て、支那の兵隊さんが驚かないの、何のて、大變な驚き方であつた。

その中に上方に、ツアンツオウリンの方の飛行機が来て、爆弾を投げ始めました。支那の兵隊さん達は皆んな青くなつて逃げ支度です。それでも太郎さんはどんなにして爆弾を落すか見てやれと云ふので、ちへと見て居ました。すると、その飛行機は丁度太郎さんの真上に飛んで来て、一つ大きなやつを落して行きました。爆弾の口火は火をふいて居ます。それを見た支那の兵隊さんはチヤミ上つて居ます。

太郎さんは爆弾が頭の上に落ちてはと思つて、例の長い口一杯に息を吸ひ込んで、勢よく「フウウツ」とやりました。すると落ちて來た爆弾も、その飛行機も皆どこかへ吹き飛ばされて仕舞ひました。

その中に滿洲の騎兵が太郎さんの方へ攻めて來ます。見る見る中に太郎さんの身の近くに攻め寄せました。そして太郎さんの方へ向つて、あいつ昨日まで僕たちの側に居た奴だ。捕虜にせいと云ふので、太郎さん曰がけて突進して來ます。太郎さんはこれを見るなり、此の時だと云ふので、一息吸ふて思ひきり吹き飛ばすと、その騎兵たちはまるで嵐に木の葉が飛ぶやうに、ギリギリ廻つて向の山へ吹きつけられました。太郎さんの傍に居る支那の兵隊さんたちは、これを見て眼を廻して死ぬものもありました。太郎さん一人曰がけて來た騎兵が、どうした譯か向の山の方へ吹きつけられたのを見て、腰をぬかしたが、ウウ　ペイ　フウの兵隊さん達も思ひ切つて突貫しません。

これを見て居た太郎さんは、頼み甲斐ない兵隊さん達と思ひ、何時までこうして居てもさりの無い事だと思ひ、敵味方の丁度眞中と思ふ所へ、足元を吹く術で一氣に飛んで行きました。こんな睨み合ひの戦争なんか止めさした方がよいと云ふので、太郎さんはそこから、両方の軍隊向けて得意の息を思ひ切り吹きかけてやりました。すると、ツアンツオリンの兵隊も、ウウ　ペイ　フウの兵隊も、皆んな滅茶滅茶になつて、どこかへ吹き飛ばされました。

それでもう弾は来なくなつた。しかし太郎さんも、こんなに同じ國に居ながら喧嘩をするものゝ心が知れぬ。一つ誠めてやれと云ふので、東を向いて息を一息スウッと吸ふと、ツアンツオリンが頭をコブだらけにして來ました。

こんどは西の方を向ひて一息フウツと吸と太郎さんの足下に、ウウペイフウが頭をコブたらけにして飛んで來ました。それで太郎さんは幼稚園の先生から聞いた通り、同じ國に居る兄弟のくせに、喧嘩してはいけないと云つて叱つてやりました。

そうすると、ツアンツオリンもウウペイフウも、太郎さんの云ふことがほんとうなので、兩人とも

「太郎さんありがとう、もう決して同じ國に居る兄弟で喧嘩はしません。」と云ひました。それで太郎さんが、「お前たち二人は…………」

と云ひかりましたら、お母さんが、太郎や、もう夕御飯ですからと云ふ大きな聲が耳に入りましたので、太郎さんが眼を醒ましました。

編輯だより

うちづらく小春日に、子供等はよくあそびます。

關東災害後第二回の冬が近づかんとしつゝあるにもかゝはらず、バラツクの生活にもかゝはらず、去年の冬よりも暖かに、玩具もあり花もある明るい、そして落ちついた日々を東都の幼稚園の子供達

が送る事のできるのは、已知未知の全國の同情から、ことに可愛い

多くの同情が、西から、南から、北から、東から、はるばると運ばれた事を今更のように思ひます、そして此の幸な秋に新たな感謝が湧き出ます、それを言葉にあらはして貢ひ得ない子供に代て、私は御禮を申上ます。

皆様の御寄稿によつて、本誌がます／＼充實に向ふ事は、ほんとうに喜ばしい事であります、終りに、本誌の編輯が大層をくれた事をおわび申上します。(編輯子)

料 告 廣 定 價		冊 数				定 價			郵 費		
料 告 廣 定 價		冊 数				定 價			郵 費		
表紙裏付		金四拾五圓				金參拾五圓			不要		
普通面一頁		金四拾五圓				金參拾五圓			不要		
冊 数		金四拾五圓				金參拾五圓			不要		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">△△△△△</div> 本邦券送れの節は一割増で御用紙へお申入下さい。		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">△△△△△</div> 本邦券送れの節は一割増で御用紙へお申入下さい。				<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">△△△△△</div> 本邦券送れの節は一割増で御用紙へお申入下さい。			<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">△△△△△</div> 本邦券送れの節は一割増で御用紙へお申入下さい。		

大正十三年十一月十五日納本
大正十三年十一月十五日發行

第二十四卷第七號

断 無
載 轉 禁

編輯者	東京女子高等師範學校内日本幼稚園協会
發行者	東京市下谷區上根岸八十八番地
印刷所	東京市京橋區木挽町二ノ一三
印刷所	越元新吉
文書院印刷部	石上文七郎

發行所

教

文

書

院

東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

電話下谷三〇四七番・一九五一番
振替東京四六一一番

第二十四卷第七號（每月一回十五日發行）

大正十三年十一月十五日印刷
大正十三年十一月十五日發行

定價金三十五錢

教文書院